

入局した頃は、胃癌の胃切除と胆嚢結石の胆摘に明け暮れ、“一人で胃が切れば一人前”と言われるが故に、1日に何件も手術に入り腕を磨いたものである。勿論腹腔鏡手術など無い時代、全て開腹手術である。それが今では腹腔鏡手術さらにはロボット手術の時代になり、開腹手術は少なくなり、いつしか胆嚢摘出術は腹腔鏡でしかやらないという時代となった。そんな中でふと気が付いたことがある。「最近胃癌の手術が減っているではないか!」。そう感じるのは私だけであろうか?このあたりを探ってみたい。

●当院でのがん手術件数

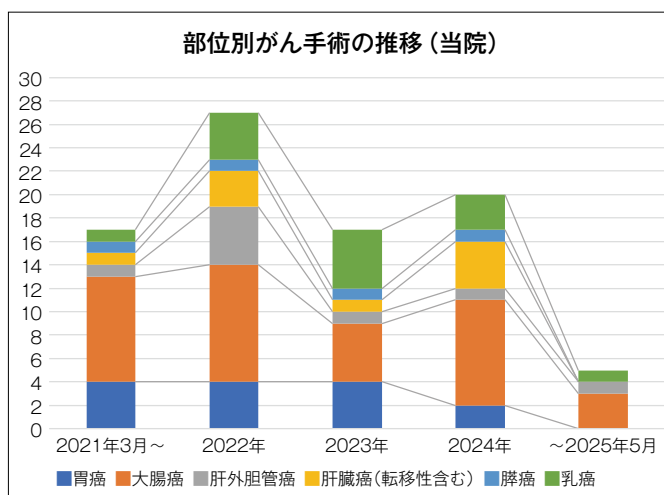
手元の手術資料では、2021年3月から2025年5月までに273の手術件数があり、その内がん手術は86件(31.5%)であった。最多は大腸癌36件(41.9%)、次いで胃癌と乳癌が14件(16.3%)、肝外胆管癌と肝切除を行った肝臓癌が9件(10.5%)、膵頭十二指腸切除を行った膵癌4件(4.6%)であった。

部位別がん手術件数(当院)

	胃癌	大腸癌	肝外胆管癌	肝臓癌 (転移性含む)	膵癌	乳癌	癌手術	全外科手術
2021年3月～	4	9	1	1	1	1	17	59
2022年	4	10	5	3	1	4	27	70
2023年	4	5	1	1	1	5	17	56
2024年	2	9	1	4	1	3	20	61
～2025年5月	0	3	1	0	0	1	5	27
計	14	36	9	9	4	14	86	273

●部位別がん手術の推移

過去5年間(2021年3月～2025年5月の実質4年間)の部位別推移では、大腸癌が毎年一定数の手術があるのに対して、胃癌は一昨年までは毎年4件、昨年は2件に半減し、今年はまだ1件も行われていない。がん手術のトップであった胃癌が、今では少なくなってきている。大腸癌が増えていることと、乳癌も毎年手術があり減っていないことも目を引く。当院の手術件数が少なく、このことから「胃癌の手術が減った」という推論は出来ない。



●がん罹患率と死亡率の推移 (厚労省がん対策関係資料¹⁾)

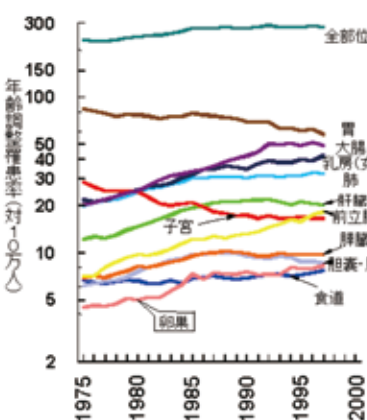
右グラフは1975年から2000年までの25年間の対人口10万人でのがん罹患率と死亡率である。

罹患率は胃癌、大腸癌、乳癌の順に多く、大腸癌と乳癌を含め多くが増加傾向にあるが、胃癌と子宮癌は減少傾向である。また、死亡率でも胃癌と子宮癌が減少傾向を示している。もはや胃癌は発生が少なく、死なない癌となったような印象である。

●胃癌手術が少なくなった理由

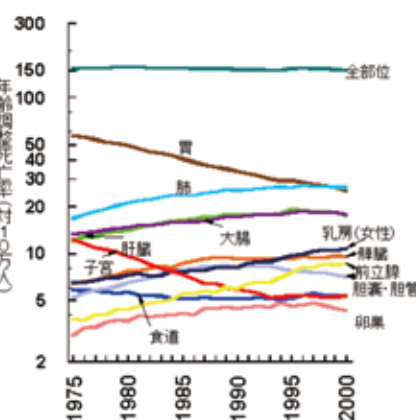
胃癌手術が少なくなったと感じたのは私だけではなく、日本中で少なくなっている。その理由は、ピロリー除菌と食生活の変化と言われている。ピロリー除菌が保険適応となった2013年からはさらに下降傾向となっている。今でも進行胃癌は一定数発生しているが、その数は減り外科医の出番も減っている。内視鏡治療の進歩で胃癌が早期に治療され、進行癌が少なくなったのも事実である。昔の外科医局では「ピロリー?そんなもんで癌が発生するのか?」と皆が思っていた。今はC型肝炎ですら治せる時代である。医学の進歩に目が離せないが、「胃癌が一人で切れたら一人前」と言われた外科医には少し寂しい気もする。胃癌の手術はどんどん減ってやがて「手術しない癌」になるのかもしれない。喜ばしいことである。

3) がんの罹患率



資料：がん研究助成金地域がん登録研究班報告書

4) がんの死亡率



資料：厚生労働省「人口動態統計」

1) 平成15年6月26日厚生科学審議会科学技術部会及び地域保健健康増進栄養部会(合同部会)：がん対策関係資料